

住まいが変われば暮らしが変わる



鈴木 有(金沢工業大学名誉教授)

住まいを変えて、十年余

1997年、築20年の住まいを増改築した。耐震工学の研究者として、阪神・淡路大震災の激震地で古い民家が少なからず生き残ったのを観て、伝統民家の構造を研究対象にし始めた頃だ。高校の国語教師を経て「源氏物語」の語り部を志していた妻は、その現代的意義の一つは環境共生のメッセージにあると気づいていた。

高度成長の盛期に建てたわが家は、手入れすべき時期だった。それなら、われわれの価値観と想いを託して、民家に学び、環境共生に配慮した住まいに変えようと考えた。

以来十年余り、私たちの暮らしぶりも、こんなに変わったという報告である。

プロ任せの家から、施主主導で

造った家へ

以前の家は、仕事と子育てで夫婦ともに余裕がなく、しかも私が新任地へ単身赴任を控えて、慌ただしく建築した。さすがに設計は自分で手がけたが、施工は担当してくれた工務店任せ。その当時主流の建材を使った、箱のような造りになった。

今度は、近江の伝統的な木造構法を取り入れて、耐震性も高めたい。地場産の自然素材で造る民家に倣って、材料にもこだわりたい。かくして施主が家づくりを主導し、地元の職人と協働して、その技を活かした住まいが誕生した。

新建材が取り囲む家から、

自然素材に見守られる家に

工業技術の成果・新建材を使って、早く安く造るのが当たり前の時代。合板やビニールクロス、合成塗料で覆われた木材など

が取り囲む居住空間は、小綺麗で手入れも要らない。ひた走るような日々には便利ではあったが、常々一抹の息苦しさを感じていた。

一方伝統構法は、土壁に漆喰塗り、床・壁・天井も無垢の板を張って仕上げ、塗装は少なく木材そのものを見せる。障子や襖や畳も、昔ながらの造作でお願いした。こうして、自然の素材に見守られるような住まいができると、外出しても早くわが家に帰りたいと思うまでになった。

エネルギーを消費するだけの家から、 生み出す家に 公共のライフライン頼りの家から、 自立可能な備えのある家に

現代は、電気・ガス・水道など、配管を通して遠くから送られてくるエネルギーを専ら消費し、暮らしの排出物は管から流して、遠くの処理場へ追いやる。

昔の日本の暮らしは、集落毎に用水を引き、その水を濾過して使った。熱源は里山や田圃から得た薪やワラ、太陽熱も活かした。ものは使い回し、排出物はすべて肥料として近くの田畑や山林に還していた。

水道水の代わりに雨水を利用し、太陽光発電、太陽熱温水器、薪も使えるようにしよう。新たなわが家は、かつての民家の智慧に学び、現代の技術も取り込んで、図に示すような「生活用水自家循環システム」を組み込んだ。

非常時に公共のライフラインが止まっても、家一軒消せるだけの防火用水も備え、しばらくは隣近所ともども凌げるようになっている。

**家族が個々に暮らす家から、
集まって暮らす家に
自然に背を向けた家から、
生態系に向き合う家に**

新建材で囲う開口部の少ない箱形の家は、外界とも隣近所とも隔離しがち、個室の組み合わせは家族同志も疎外しがちだったように思う。

新しいわが家は、玄関と台所につながる多目的の広い空間を1階に取り、食事も仕事も来客の対応も、ここですべて済むように設えた。お陰で家族はいつも、眠るとき以外は顔を合わせて暮らしている。

以前は西日を嫌って閉じていた壁面も空け、どの部屋も2方向に開口を設けて、通風と採光を優先した。家の周囲の常緑樹が育ったので、緑のカーテンに取り巻かれ、強い陽射しは葦簀で遮るから、真夏もエアコンはほとんど使わない。冬場は多目的の一室だけ暖房し、その余熱を2階寝室に送り込むだけで、普段は過ごしている。

危険に敏感な小動物が折々出没するのは、自然素材の家が彼らにも安全で心地よいからであろう。ちなみに、生活排水はすべて自家の合併処理浄化槽に流し、処理水をトイレの洗浄水など中水に再利用している。浄化を担う数多の微生物とも共棲している感覚だ。彼等に元気で働いてもらえるよう、薬剤は使わない。我々も質素に健康で暮らさねば、と心がけている。

**便利快適を追い求めた家から、
手間暇を楽しむ家に**

以前の家では、レバーやコック一つで「便利」に使える設備に頼り、暑さ寒さも設備で制御して、「快適に暮らしている」と思っていた。

新しいわが家は、陽射しの取り込みと遮蔽をはじめ、季節によって設えを替える。雨水を自家浄化する機器は、屋根から流れ来る落ち葉や小動物を定期的に取り除かねばならない。地下の貯水槽が満タンになったら警報が鳴り、夜中でも放水に切り換え

る。年に一度は、貯水槽の大掃除も必要だ。薬剤処理なし昼は天日干しもしなければならぬ。

自然素材の家で自然エネルギーを活かして暮らすのは、かくの如く手間暇が掛かる。しかも、すべては家族の協力なしにできない自然と向き合う営みである。それが、体験してみると実に楽しいのである。

ほんとうの豊かさとは何か、を考え直す

かくしてわが家は、現代技術の恩恵を受けた便利快適な「住宅」から、資源を循環させ環境と共生し持続可能を図った、かつての民家の仕組みに学ぶ「住まい」に転換した。現代の技術を採り込んで、現代的な生活水準の質をほどほどに保ちながら、往時の生活システムに戻す試みを行ったわけである。

大戦後、私たち日本人は、ひたすら便利と快適そして経済効率を追い求めてきた。住まいや暮らしも例外ではない。新たなわが家の十年余は、『人間として本来の豊かさとは何か?』を根底から考え直す時間となった。上述したような暮らしの日々を積み重ねて、私たち夫婦の中に、自然に寄り添って生きる新しい生活観が育まれた。

7年前、妻が乳癌の告知を受けた。自らの細胞が変質してわが身に警告を発している病なのに、切除したり薬や放射線を浴びせる攻撃治療しかない西洋医学の治療は、私たちの人生観にふさわしくないと考えた。生活そのものを見直し、東洋医学的な代替療法で、癌と共存する道を選んだ。有機栽培の農作物にこだわる玄米正食を実践して、妻は穏やかに癌と共生している。

私たちがこうした決断をなしたのも、新たな住まいで暮らしが変わり、自然との共生を重視する価値観が確かなものになったお陰である。

